

詩とエッセイ:懐かしい風景 (3)

●日々動きは鈍くなっている私ですが、新聞を見ても、テレビを見ても、国内外で起きていることに恐怖を感じています。

とよださなえ

はじめてのペルー

リマの空は灰色だった
飛行機の中からも
街の目抜き通りに立っても
ホテルの屋上からも
やっぱり ぶあつい灰色の空
ぬぐいきれない がんこな灰色

空港の超近代的なたたずまいに
ビックリし
カリャオー帯のとてつもない
魚粉の悪臭で
またビックリし
建ち並ぶ古いアドベの家々に
地方色を見て、安堵する

税関の係官が
着がえの包の中から
日本人の持っている電気器具を
摘発するこざかしさで
アドベの前に
ひるがえる
衣類を点検している
可愛気のない旅行者の
自分があった。

リマの車

車が走る
況山の車が走っている大通り

色々な車だけれど
色々な想いをもって
走っているのだろうけれど
皆、同じことは
埃をたっぷりかぶっていること
それと
十米でも一米でも
前に行こうとする
車の流れが止まっても
十センチでも一センチでも
前へとつける
広い交叉点は
完全な
巨大ジグソーパズルの出来上り

死者の祭り リマ

その日だけ
ノートに書きつけた
ラテン語に節をつけて読む
お経屋は
コカコーラの瓶に水を入れ
聖水として商売に使った

お墓には
三つの種類があった
家族が住めそうな
室内をレースで白々と飾り
“平和、などと大理石に
金文字を刻りこんだ
オシロのタグイ
滞納すると強制的に追い出され
アパートの窓のように
仕切られながらも
切花を飾れるという
サラリーマン用の墓
物さしと割りばしを
紐で括りつけた
十字架がバリバリと

参拝者の足元で鳴る
貧民 とりわけインディオの多い
黒い墓地

インディオにしては
珍しく肥った女性が
膝を地につけ
上体を派手にくねらせ
空を見上げ
泣いていた
さしたばかりの
汚れていない小さな十字架
赤ちゃんを亡くしたのだろうか
幼児としか言えない子が
三人も彼女の傍にいたから
(dia de los muertos)

成人式

二十才になった人間が沢山
そこにも あそこにも
白い衣装や、赤い衣装で
緑の思想か 黒い思想か

成人式の誓いの言葉の中に
世界とか 平和とか 生きるとか
男も女も使うようになりました

会社員も学生も
百姓も商店の人も
この日を迎える前から
お膳立てをされなくても
それなりに
考えながら
生きていきます

トガッタ月

澄んだ大きな窓ガラスの中に
月と星
梅の老木と赤い燈がある

風に吹かれて
トガッタ月は
カタカタと鳴る
ガラスの上で
三角形の形をニッ残したり
小さな楕円の形になって
秋の光を映した

その下では
赤い燈の玉が
一っいきごんでキラリと輝いた
維い風に梅の影絵がゆれ
赤い光は散った

月と燈の無言の戦いをよそに
星は好きな所を
とびはねた

ガラスの中は次の舞台を待ち
月は
窓が鳴る度におどった

— 1 9 5 4 —

エッセイ：シリア刺しゅう

このところ、イスラム国とかI Sという言葉をよく聞くようになった。イスラム国という呼び方は改めるとはいわれたが、まだまだ目にも耳にも入ってくる。イスラム教の信者の方々には迷惑なことだろう。多発するテロと羅列される国々の名。四十年前、三年半エジプトのカイロに住んでいたせいか、イスラム教徒の知人もあるので、少しでも弁解したい気持ちにさせられた。

結婚前、石油会社で外航船に外国で給油をする仕事をしていた。イエメンのアデンでのオーダーが入ったが、港湾労働者のストライキが続いていて、給油は出来ない所以他の場

所を選ぶようにという連絡をした。五十年前のことだ。二分されたり、イギリスやソ連の間で複雑な歴史が続いていたのだろう。

今、私の手元にシリアの刺しゅうのあるナプキンがある。白と金色の細い糸で、優雅だ。こんなに美しいものを創っている国なのに、内乱で刺しゅうどころではないかも知れない。きれいなシリアの女性が幼児を連れ、ダマスカスから逃れ、クルド地域の避難所で一息ついたもののISへの空爆で又逃げ続けたというテレビを見た。彼女が持つマイクは激情で大きく揺れていたが、話していた場所は埼玉県の間宮町だった。そしてシリアから逃れてきたという人々が多勢映った。避難民の受け入れに日本は冷たいと聞いていたので、一寸ホットした。美人さんが話し終ってニコリ笑い、戦争のない日本に来られてうれしいとつぶやいた言葉と表情に、あなたの国、シリアの刺しゅうが似合っていますよと声をかけた気持ちになった。

一九九四年にいけばなインターナショナル（I・I）の中東ではじめての世界大会がヨルダンであった。池の坊の家元グループと、I・Iの委員の方々、その他の中の一人として私も参加した。総勢三十名位だったろうか。壇上で活花のショーをするのは池の坊グループ。他は夫々の流派で会場での活け込みだ。世界中各国から参加があったから、大規模な集りだ。ヨルダン王国の王妃の主催ということで、細やかな気遣いが見られた。個人でオーダーしておいた花が着かなかったのは、やはりアラブ国ということもあったが…。日本にある各国の大使館員の夫人達の多くが、華道を学んで帰国し、I・Iの会員が夫々の国で増え、組織されている。大使館とは限らず、日本に駐在していた方々も同じだ。池の坊の舞台は英語の通訳も含め、海外でのショーに慣れていて、立派だった。会場には外国人でお生花を活けているのもあった。日本人の所には立ち止まった見物客が多かった。パーティでは皆さん着物姿で会場を華やかにし、アラブ料理も喜んで召し上っていた。カイロにいた時、日本からの各種の客はアラブ料理に辟易し、白い御飯を食べさせてと言っていたのは男性だった。これは何だろうと、分析しながら口に運ぶ女性達の好奇心の強さ。花展が終わると、死海へ行き、インディジョーンズに出てきたペトラへの観光。現場までしばらくは一人ずつ、交通手段として馬に乗った。年を忘れさせてくれた無邪気な時間だった。その後隣国シリアに入った。何の心配もなく、ダマスカスできれいなホテルに入り、パルミラの遺跡を見に行った。

何の危険も感じず、安心して旅を楽しんだ、そのヨルダン、シリアの名が出てくるニュースは二十年前には思いもよらぬものだ。シリアの刺しゅうの布を友人たちに見せて歩く私。マッサージを受け、終わった時、イスラムのお祈り形とつぶやいて、起きる私の祈り。

（とよださなえさんは、2023年11月27日に肺癌で天に召されました。享年84歳でした。とよださんらしく、3か月間でしたが穏やかに療養し、静かに旅立ちました。自分の事よりも人のことを想い、いつも笑顔で人々を励ましてくれる人でした。私の手もとにこの詩集が残されました。詩とエッセイの掲載をととても喜んでくれていましたので、しばらくの間、このままホームページに掲載させていただきたいと思います。塩尻和子）